資料

学生と地域を巻き込んだ認知症理解に関する活動報告

辻　幸美・高岡　哲子・吉田　直美

（2018年12月26日受稿）

抄録：　北海道文教大学人間科学部看護学科老年看護学領域は，2018年度に恵庭市地域と連携をとり，学生の認知症高齢者の理解を深めるために，認知症高齢者とかかわることができる企画を考案し実施した．本資料では「RUN伴in北海道文教大学」「認知症カフェinオープンキャンパス」「看護師国家試験応援出張認知症カフェ」の実践報告をする．結果，学生は実際に認知症高齢者とかかわり共に過ごすことで，認知症高齢者をイメージすることができた．また，認知症高齢者にも笑顔がみられ，脳への刺激となったといえる．今後は，グループホーム（以下:GH）に出向いて認知症高齢者の方とコミュニケーションをとり，どのように生活をしているのか学習する実習を考えていきたい．さらに，学生プロジェクトを立ち上げ，学生が地域に出ていき認知症の理解を深めることができるような，企画にも発展させたいと考える．

キーワード：地域連携，老年看護学領域，認知症高齢者，学生

Ⅰ．はじめに

高齢化率の上昇に伴い，認知症高齢者が増加すると言われているわが国では，2013（平成25）年から2017（平成29）年までの5年間の計画として，認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）[1]が打ち出された．そこでは「標準的な認知症ケアパス作成・普及」「早期診断・早期対応」「地域での生活を支える医療サービスの構築」「地域での生活を支える介護サービスの構築」「地域での日常生活・家族の支援の強化」「若年性認知症施策の強化」「医療・介護サービスを担う人材の育成」の7点が挙げられ，今後，増加するであろう認知症の方に対する施策として，地域の充実を図ることとなった．また，同2013（平成25）年12月にロンドンで英国・カナダ・フランス・ドイツ・イタリア・日本・ロシア・米国による「G8認知症サミット[2]」が開催され，世界的にも認知症の増加は，課題であったということが報告された．これを受けて，わが国では，2014（平成26）年11月に認知症サミット日本後継イベント[3]が開催され，以下の3点が発表された．1つ目に「団塊の世代が75歳以上となる2025年を目指して，認知症地域包括ケアシステムを実現」，2つ目には「認知症高齢者にやさしい地域づくりに向けて，省庁横断的に認知症にかかわる施策全般の総合的な戦略をしていく」，3つ目に「認知症の方ご本人やそのご家族の視点に立って施策を推進していく」であった．このように，認知症対策は，わが国における国家戦略としての最重要課題となった．

その中にあって，本学の老年看護学領域は，学生が認知症を理解して適切な援助ができるように教育するには，机上の授業だけではイメージがつきにくいと考えた．そこで，学生に認知症高齢者を理解してもらうためには，認知症高齢者本人と時を過ごすことが，一番効果的なのではないかと考えた．同時に，認知症高齢者を地域全体でサポートしようというわが国の考えも相まって，恵庭市における認知症カフェと北海道文教大学の老年看護学領域としての教育とコラボレーションができれば，本学としても地域貢献に参画できると推察

北海道文教大学人間科学部看護学科

できる.

Ⅱ．地域の特徴

本学が位置している恵庭市は，2017（平成29）年10月1日現在，人口が69,529人であり，このうち65歳以上の高齢者は18,333人，高齢化率26.4％[4]となっていた．恵庭市は，高齢化に伴い2012年から2026年にかけて地域包括ケアシステムの深化・推進と題して様々な対策を立て，実施している．2018年は高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画（第7期）にあり，この第7期は「団塊の世代」が75歳以上となる2025（平成37）年の高齢者介護に対する姿及び「地域包括ケアシステム」の深化・推進を念頭に，2023（平成35）年における目標を立て，そこに至る2018（平成30）年度から2020（平成32）年度までの3年間を計画期間としていた.

第7期事業計画では，基本理念を「恵庭市に住む高齢者が，認知症や介護が必要な状態になっても，ともに支えあい安心して暮らせるよう，地域包括ケアシステムの推進に努め，明るく健やかな地域社会を実現します[4]」と掲げていた．そのため，認知症の方が住みやすい社会を，生活の場を提供しようと，官民一体で地域包括ケアシステムが発展している特徴があることがわかる.そこに，市からの委託で「恵庭市地域包括支援センターたよれーる」があり，認知症地域支援推進委員が常駐し，地域の認知症高齢者を見守っている現状がある.

Ⅲ．グループホームこもれびの家の特徴

GHこもれびの家は恵庭市にあり，事業開始は平成20年7月1日で，2ユニット18人収容のGHである．既存の特別養護老人ホームや介護老人保健施設のような決められた日課で生活するのではなく，利用される方の生活リズムを大切に考えるGHであった．また，GHこもれびの家は利用される方の特徴を捉え，コーヒーをドリップできる方をマスターとして，週に数回認知症カフェをオープンしていた.

Ⅳ．本学科の特徴

本学科は，4年制大学の人間科学部に属し，看護師を育成している．1学年80人程度の学生が講義・演習・実習を通して学習している．学科の教育理念は「医学・医療がめざましい進歩を遂げる現在，看護職者には高度な知識・技術を修得するとともに幅広く医学・医療について総合的視点をもつことが求められている．また，体や心が病んだ患者を対象とする看護職者には，患者の気持ちを十分にくみとる豊かな人間性が要求され，さらに人間・社会・環境を理解し，深い洞察力と総合的な判断力を身につけることが必要である．これら看護に必要な新しい知識，技術を身につけさせるため，実践的な教育を行う」であり，これに則した教育を行っている．看護教育は，看護の対象者である人間のライフステージ毎に，小児看護学・成人看護学・老年看護学に分かれている．その他，母性看護学・精神看護学・在宅看護学などの科目もあるが全カリキュラムを通して重要となるのは，看護の対象者を理解することである．特に老年看護学は，高齢者と学生の時代背景や家族背景，成育歴などのギャップが大きく，学生は高齢者をイメージすることが難しく，教育方法を工夫する必要がある.

Ⅴ．老年看護学領域における地域連携

老年看護学領域では，学生に高齢者を理解するための一助になればと思い地域と連携し，以下の3つの企画を実施した．地域における連携の重要性は，モデルコアカリキュラムの社会の変遷への対応として「社会の一員として」の判断力も求められていることと合致すると考える.

1）RUN伴in北海道文教大学

2018年7月20日（金曜日）12:20～13:00に「RUN伴」恵庭市の出発を本学で実施した.

「RUN伴」とは，NPO法人認知症フレンドシップクラブが主催するイベントである.NPO法人認

知症フレンドシップクラブは，認知症になっても変わらない暮らしができる社会の実現を目指して活動している全国のネットワーク団体である．「RUN伴」は，今まで認知症の人と接点がなかった地域住民と認知症の人や家族，医療福祉関係者が一緒にタスキをつなぎ，日本全国を縦断することを目的としている．老年看護学領域における本企画の目的は，認知症高齢者を1人でも多く本学に招き，学生とコミュニケーションを取る場を設け，学生が認知症高齢者の理解を深めることである．本企画メンバーは，GHこもれびの家職員2人，恵庭市認知症地域支援推進委員2人，老年看護学領域の教員4人であった．

GHこもれびの家職員より「RUN伴」に本学も参加してはどうかと打診があった．2018年6月7日に顔合わせを行い，6月25日（月曜日）10:00より詳細を話合い，本領域も承諾の上スタート地として場所の提供を行うこととなった．学生への周知は，学生掲示板にポスターを掲示して参加を呼び掛けた．

当日，11:00に認知症の方20人をお迎えし，11:30から学生が食堂に認知症の方を誘導して，学生と共に昼食を摂った．本企画は，12:00から中庭に皆で集合して，12：30に「RUN伴」スタートというスケジュールであった．学生は，食事中に，認知症高齢者がムセないように水分が必要であるという知識を活用して，自ら認知症の方にお茶か水かを確認し，配膳行動を取っていた．また，コミュニケーションもとれており，各テーブルから，笑顔と笑い声が絶えず，認知症高齢者からは「若い子といると若返えります．」と言葉が聴かれた．参加学生は4年生が主で，昼食を認知症の方と共に摂ることができた．その後，スタートを車椅子の認知症高齢者とともに見送った．

2）認知症カフェ inオープンキャンパス

本学のオープンキャンパスは，4回行われる．その中で，老年看護学領域が担当する2018年9月23日（日曜日）12：30 ～ 14：00に，認知症カフェをオープンした．

オープンキャンパスは，本学を受験したい，または受験しようかと迷っている高校生，高校既卒

写真1　恵庭市「RUN伴」出発：認知症高齢者とGH職員と学生

者が来校して，本学がどういうところで，どういう授業をするところなのかを見学する．本企画の目的は，認知症高齢者でも「もてる力」があり，その「もてる力」を発見してもらうことである．この「もてる力」を発見することが大切であることを理解してもらうため，認知症の方にコーヒーを入れてもらい，この動作を観察することで，できていることを参加者グループで話し合ってもらった．本企画のメンバーは，認知症高齢者2人，GHこもれびの家職員2人，恵庭市認知症地域支援推進委員2人，老年看護学領域の教員3人，学生4人であった．

老年看護学領域の教員が，領域会議の場で話し合い「認知症カフェ inオープンキャンパス」を企画した．この企画内容を2018年6月25日（月曜日）にGHこもれびの家で打ち合わせを行い，施設管理者に承諾を得た．物品準備は老年看護学領域の教員が行い，学生のお手伝いとして4年生に声をかけ，目的・方法を説明し，同意した有志4人が集った．事前準備としては，9月10日（月曜日）15:00からGHこもれびの家で，学生4人のうち1人の学生と認知症高齢者の顔合わせを老年看護学領域の教員2人が同席のもと行った．また，恵庭市認知症地域支援推進員2人も同席した．当日の準備は，9:00から教員3人と学生4人で行い，10:00に認知症高齢者をお迎えし，全員で行った．また，11：30から全員で昼食を食堂で摂った．GHこもれびの家からはクッキーの差し入れがあり，コーヒーとともに配ることにした．

当日，認知症カフェのマスターとして認知症高齢者2人に，オープンキャンパスに来た参加者へ，コーヒーを振る舞ってもらった．その中で，参加者は，実際に認知症の方の言動を観察することができ，「意外にできることが多いのですね．」という言葉も聴かれ，新たな発見の1日になったと推察する．また，学生は，認知症の方の特性に合わせたかかわりを行い「RUN伴」と同様に昼食時も，水分摂取の確認したり，運んだりしていた．食後は，排泄の有無を確認し，トイレまでの誘導も自主的に行っていた．実施中の学生は，一緒に来場者を受け入れる用意をして，来場者を受け入れ，コーヒーを運んでいた．前回と同様で学生は，4年生でこの時期はすべての実習が終了したということもあり，認知症高齢者に対する観察・支援に関してはスムーズに行動できていたと推察する．

3）看護師国家試験応援出張認知症カフェ

2018年11月15日（木曜日）12:10 ～ 13:00に，「看護師国家試験応援出張認知症カフェ」を実施した．

写真2　認知症高齢者（認知症カフェのマスター）とGH職員と認知症地域支援推進委員

写真3　GH職員と認知症地域支援推進委員と学生が見守る中，コーヒーを用意するマスター

本企画の目的は，看護師国家試験を受験する学生の応援と，学生に認知症高齢者の理解を深めてもらうためである．本企画メンバーは，認知症高齢者2人，GHこもれびの家職員2人，恵庭市認知症地域支援推進委員が2人，老年看護学領域の教員2人であった．

老年看護学領域の教員は，領域会議の場で話し合いを行い，「看護師国家試験応援出張認知症カフェ」を企画した．この旨を2018年10月24日（水曜日）にGHこもれびの家へ打診し，10月24日（水曜日）に施設管理者から承諾を得た．物品準備は老年看護学領域の教員が行い，学生への周知は国家試験対策担当教員からの告知とポスターの掲示によって行った．施設との打ち合わせは11月13日に実施し，学生人数，必要物品などを含めた準備について口頭で確認した．恵庭市認知症地域支援推進員への連絡は，GHから行うことになった．当日の準備は，11:00から教員2人が，11:30に認知症高齢者をお迎えし全員で行った．GHこもれびの家からはクッキーの差し入れがあり，コーヒーとともに振る舞った．

写真4　認知症カフェオープン：コーヒーをドリップするマスター

写真5　コーヒーをドリップするマスター

当日，外部講師による国家試験対策講義を受講していた学生の昼食休憩時に，コーヒーを提供した．認知症高齢者はコーヒーをドリップしてコーヒーを振る舞う役割の中心を担い，他のメンバーがサポートした．認知症高齢者は笑顔で対応し，学生も「コーヒーおいしかったです．ありがとうございました.」と声をかけている姿や，他の企画の「RUN伴」や「オープンキャンパス」をサポートしてくれた学生たちは，その時の話を基に談笑したりもしていた．学生は，認知症高齢者と上手にかかわることができていた．また，当日の講義内容にオレンジプランが含まれていたこともあり，政策と認知症カフェが合致して知識の定着にも一役買ったのではないかと推測する．

このように，認知症高齢者と学生がかかわる良い機会になったのではないかと考える．

Ⅵ．まとめ

この度の企画は，老年看護学領域で地域連携という考え方から出発した3回のイベントであったが，学生・地域両者にとってメリットがあったと考える．その理由は第1に，学生が認知症の方を実際目の前にし「観る」ことによって，認知症高齢者を理解するためにとても良い機会となったといえる．生活体験の少ない現代の学生にとって，高齢者自体をイメージするにも困難さを感じるが，さらに認知症高齢者は，学生にとって想像できない存在であり，机上の学習からではイメージ

はもとより，理解するためには多大なる学習時間を要するのではないかと考える．その中で，この3回で体験した認知症の方との共同作業などは，認知症高齢者を理解するのに大いに役立ったのではないだろうか．今後は，実施時期について老年看護学実習の前が良いのか後が良いのか学習進度や学習効果を踏まえ，熟考していく必要がある．第2に，認知症高齢者の方にとって学生とのかかわりが刺激となり，笑顔がみられ「若い子といると若返えります.」という意見も聴かれた．これらは，脳への刺激となり，脳神経の活性化につながる．今後も認知症高齢者が活き活きと生きていける地域貢献の一つとして老年看護学領域も位置したいと考える．

以上のことから，学生が認知症高齢者を理解するために必要な「観る」ということが，どれほど重要であるか分かったため，今後は，老年看護学実習で取り入れていきたいと考える．そのため，GHに出向いて認知症高齢者の方とコミュニケーションをとり，どのように生活をしているのか学習する実習を考えていきたい．さらに，学生プロジェクトを立ち上げ，学生が地域に出ていき認知症の理解を深めることができるような，企画にも発展させたいと考える．

Ⅶ．おわりに

今回は4年生のみのかかわりであったが，学生にとって，認知症の方の理解を深めることにもつながったと考えるため，今後は1年次から順序性をもった体系的な地域連携の基盤つくりを行う必要がある．また，認知症高齢者を校内に招き，学生とのかかわりを持つことができた.このことは，老年看護学領域が地域密着型の教育を考える一助になったといえる．

大学はそれ自体が社会貢献しなくてはいけない機関であり，今回のような地域連携で，認知症高齢者の方と共同作業ができたということは，老年看護学領域として，本学にも貢献できているといえよう．今後もさらなる貢献として，地域と連携を取り，学生と認知症高齢者が共に参画できる場を作っていきたい.

最後に，今回の地域連携の企画は，今後，本学科さらに本学全体に波及することを期待する.

なお，写真に写っている参加者と学生には本学紀要掲載の承諾を得ている.

謝　辞

今回の実践報告をまとめるにあたり，「GHこもれびの家」所長寺澤道恵さん，介護リーダー永野佳恵さん,「恵庭市地域包括支援センターたよれーる」認知症地域支援推進委員奥宮啓さん，板谷貴子さんには，多大なるご協力をいただきました．感謝いたします.

文　献

1)　認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）（2018．12．13）．厚生労働省 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000064084.html

2)　G8認知症サミット（2018．12．10）．厚生労働省https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000033640.html

3)　認知症サミット日本後継イベント（2018．12．10）．厚生労働省 https:// www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000058871.html

4)　第7期（2018年～ 2020年）恵庭市高齢者保健福祉計画　恵庭市介護保険事業計画2018年3月（2018．12．3）．恵庭市 http://www.city.eniwa.hokkaido.jp/www/contents/1522826877558/ files/all.pdf

Report on Activities to Promote Understanding of Dementia for Students and The Surrounding Community

TSUJI Yukimi, TAKAOKA Tetsuko and YOSHIDA Naomi

Abstract: In collaboration with the city of Eniwa in Japan, the Gerontology Nursing Field section of the Department of Human Sciences at Hokkaido Bunkyo University developed and implemented an initiative in 2018 to help increase students understanding of elderly people with dementia by interacting with them. The purpose of this paper is to report the results of conducting the following events: 'Run TOMO in Hokkaido Bunkyo University', 'Dementia cafe in Open Campus', and 'Trial of Dementia cafe to support national examination for nursing license'. During these events, students were able to interact with elderly people with dementia. Further, as the elderly with dementia were all smiles during the events, it is suggested that these opportunities served to stimulate the intellectual activity of the elderly with dementia. The authors expect to develop training plans that enable students to learn how elderly people with dementia live in group homes and how to communicate with them during visits group homes. Further, more a student project in which students conduct community-based activities that promote the understanding of dementia will be developed.

Keywords: collaboration in community, gerontology nursing field, the elderly with dementia, students